図版解説

李士達筆　竹裡泉声図

東京　某　氏　蔵

この竹裡泉声図は桑名鉄城氏の旧蔵品で、かつて「九華印室鑑蔵画録」に収載されたことがある。ここに改めて紹介するのは李士達の代表作の一つに数えらるべき本作品の真面目が、原色印刷によってよりよく知られるであろうと考えるからである。李士達は字を通甫、号を仰槐といった。呉県（江蘇省）の人で、万暦年間（一五七三―一六一九）の後半がその活躍期であったことは、作品の年記あるものが、ここに集中していることによって明らかである

前景には精緻な筆で画きこまれた竹林のうちに坐談する二高士とこれに仕える三人の侍童を画く。竹林の間を流れる渓流はやや形式化した描写であるが甚だ技巧的であり、後の袁派に見られるような要素をもっている。この渓流にかかる橋の欄干の朱の色が一きわ鮮かなのは竹林の緑が背後にあるからであろう。画面下半分を占める竹林に対して、上方には、所謂巨然風の山がその裾を雲と杏花につつまれてそびえているが、この部分の描写の密度は、前景と対等であり、画面上方は前方にせり出して広がる感がある。この巨然風の山容は左手の塗りのこされた白い滝の描写に、呉鎮の面影をひそめてはいるが、その盤頭の羅列的な表現から、謝時臣画の直接の影響のもとに画かれたことを思わせる。謝時臣は、李士達と同じ呉県の先達であり、その文人画の正系からややはずれた職業的な制作にも、共通点が見出せる人である。この二人の画家の具体的な結びつきを、文献資料の上でいますぐには指摘出来ないとしても、少くとも様式的には密接な関係があったと考えてよいと思う。更には、嘉靖期を中心に遺品を残す謝時臣とともに、同じ呉県の出身の盛茂燁の存在が、その画風の類似によって浮び上ってくる。崇禎年間（一六二八―一六四四）を中心に活躍する盛茂燁の作品には、李士達ほどの画風の振幅はない。盛茂燁画にみられる

模糊とし、コントラストを抑制した作風は、この竹裡泉声図とあい似通うものがあり、画面そのものも、ともに横巾の広いものを用い、画かれた対象が、凝集するというよりも、柔らかい雰囲気の中に拡散していくような趣きがある点が注目されるのである。盛茂燁も、李士達と同じく、その生卒年を詳かにしないが、遺品からみて李士達より一世代あとの人であることは確かであり、巾広い画風を持っていた同郷の先輩、李士達の作風の一面を吸収し、さらに純化、洗練させ、自らの画風を形成していったとは考えられないであろうか。いづれにしても、このような論議は、精細な文献的裏付を必要とするものであるから、ここでは、さし当り問題点としてのみ指摘しておきたい。李士達の作品としては静嘉堂の山亭眺望図が最もよく知られており、傑作の名に恥じないものであるが、この竹裡泉声図は彼の別の一面、そしてよりスタンダードな一面を示す好例であり、かつ彼の絵画史的位置を示唆するという意味で重要な存在だと思う。

本図は技法的な面からみてもまさに精品そのものであり、淡い緑色で画いた竹林の上に墨を重ねて立体感を表現したり、人物を浮上らせるために裏彩色を用いたり、かなり職業画家的な傾向の濃厚な作品である。人物の描写そのものは、甚だコンベンショナルであるが、このことは彼が画中の人物に感情移入をはかるよりも、画面全体の雰囲気を大切にした制作態度を示すものといえよう。このような精品と、彼の作品によくみかける荒々しい粗放な筆致の人物画とが、彼自身の画風の展開の上でどのような関係にあるのかという問題も、今後に残された研究課題であり、このことが解明されれば、彼の画家としての立場はより明確なものになるであろう。画面上部は絹が傷み絹巾一杯の補絹があるが、李士達の自題にまでは及んでいない。自題は以下の通り。

雲間樹色千花満」竹裡泉声百道飛」

李士達　白方 李印士達　白方 通甫

（戸田禎佑）